

ちば里山カレッジ「第 3 回フォローアップ研修」実施報告書 (3)

特定非営利活動法人ちば里山センター

題名	ちば里山カレッジ「第 3 回フォローアップ研修」 観察会「里山のきのこ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡治幸 フィールドアシスタント：NACS-j 自然観察指導員 小林義和、石松成子 講義「里山活動ときのこ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡治幸 講義「きのこの栽培について」 「きのこの放射能汚染について」 講師：千葉県森林インストラクター会 鶴見治
日時	平成 28 年 10 月 29 日 (土)
会場	千葉市 昭和の森&緑公園緑地事務所
出席者	受講生 36 名 スタッフ 4 名、講師 2 名、フィールドアシスタント 2 名
内容	9:00~11:30 観察会「里山のきのこ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡治幸 フィールドアシスタント：NACS-j 自然観察指導員 小林義和、石松成子 11:30~12:30 緑公園緑地事務所にて昼食 12:30~14:00 「里山活動ときのこ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡治幸 14:15~16:00 「きのこの栽培について」 「きのこの放射能汚染について」 講師：千葉県森林インストラクター会 鶴見治
報告	【里山のキノコ】講義&観察会 ・まず講師から野生きのこ観察についての基本的注意を受け、2 班に別れてフィールドに出た。昭和の森は 100 ヘクタールを超える総合公園で、杉林、雑木林、竹林と多様な環境があり、講師の指導で目が慣れてくると、多くの野生きのこを観察、採取することができた。 ・種名不明のものを含め採取した約 50 種の野生きのこをブルーシートに並べ、講師が分類、解説をした。野生のエノキダケ、中華食材になるスッポンダケなど話題は尽きない。 ・午後からは、室内でまとめの講義があり、特に毒キノコについて丁寧な解説があった。縦にさけると食べられる、茄子と煮ると食べられるなどの言い伝えはすべて間違いであり、一つひとつ覚えていくしかないこと、地域で食べられているキノコ以外に手を出さないことなどが強調された。 ・特にウラボニホテシメジ（通称イッポンシメジ：食）とよく似たクラウラベニタケ（毒）の被害が全国的に一番多く、千葉でも身近な野生きのこであることから、その見分け方と限界（見分けがつかない場合がある）について、丁寧な解説があった。

【きのこの栽培について】

・鶴見講師は、県職員としてシイタケの人工栽培の指導に30年来取り組んできた知見を生かし、原木シイタケの人工栽培についての基本的な解説をしたのち、里山団体や個人が取り組む際のポイントをあげ、参加者の理解を深めた。

・まず、簡単にシイタケ人工栽培の歴史に触れ、古くから身近に行われており里山にとっては欠かせない森の恵みであることを説明した。

・原木栽培は、伐採～葉枯らし～玉切り～植菌～仮伏せ～本伏せ～採取の工程があるが、いずれの工程も、原木の乾燥程度、気温や湿度の変化、原木の菌糸の伸長具合などを踏まえて実行するもので、形だけ取り入れても意味がないこと。栽培業者は一定期間の発生量が最大になるよう様々な工夫をしているが、収穫量にノルマのない里山活動では、その活動ペースに合わせて栽培すればよいこと。など示唆に富んだ知見が惜しみなく披露された。

・質問時間になると、原木の作り方、菌種の選び方、収穫時期の処理などに関して詳細な質問が途切れなく続き、途中で司会者が止める必要があった。多くの里山団体がシイタケ栽培に関して、会員ごとに知見が異なり合意ができない悩みや疑問を抱えていることがよくわかる場面だった。

「きのこの放射能汚染について」

・千葉県は福島原発事故の影響で、栽培きのこ、野生きのこも出荷制限を受けている。出荷制限及び自主規制のルールやその実態は非常に複雑であるが、多くの栽培業者は個別審査を経て従来どおりの市場出荷を行っている。

・わずかな量を直売所に出す、あるいは里山活動の中で不特定多数に配る場合も規制がかかっているため、事実上はできないと理解すべきである。

・自己責任で野生きのこ、栽培きのこ、タケノコ等を食べることは規制されていないが、ごく小規模なホットスポットが地形などの要因で生じている可能性がある。検査費用も安くなっているため、念のため検査することをお勧めする。

添付資料（写真）

◆ 「里山のきのこ」（観察会）、「里山活動ときのこ」（講義）



◆ 「きのこの栽培について」「きのこの放射能汚染について」（講義）

